



始



持100
346

百科文庫發刊の辭

社會の各方面に互りて、名高い書物や面白い作品を小冊子にして提供する。

現代知名の方々に依頼して、なる可く平易簡易に書いて廉價にして、益々よく製本し度い。

種目は、先づ哲學叢書、宗教叢書、教育、科學、文藝思潮、政治經濟、偉人、驚異、問題叢書等の十餘種に分ち、更に各種に成る可く代表的のものを選び續々發刊する。

大方の諸氏、幸に愛讀の榮を給へ。

大正三年九月

日月社白

3. 1. 16
内交

宗教叢書發刊の辭

從來の宗教書類は概して教訓的に傾き、若しくは學究的に偏し過ぎてゐた。其結果、特殊の信者や専門の學者には好都合であつたが、一般の讀書界には難解で縁遠いものであつた。やゝもすれば讀者に反感を起さしめ、或は喰はず嫌ひの悪感を起さしむる餘弊さへあつた。然るに最近社會の變遷と、知識欲の進歩は各方面に開展して宗教上にも平明な解釋と新しい説明を要求するに至つた。

弊社は、茲に鑑みる所あり、既成宗教の經典や、聖賢の思想言行を最も新しく最も平明に解釋し、更に古今の名著と偉人の言行から特に宗教味に富むものを選出して、廣い意味に新しい意味の宗教書類を編成しようと思ふ。

かくして、既成宗教を現代的に生かし、現代的の思想及藝術から、宗教味を闡明し、以て聊か新時代の宗教を闡示し度いと思ふ。かゝる趣旨に基き、茲に時世に適合せる宗教書籍を一般讀書界に提供する。大方の諸賢から公平なる批評と指導を希ひ度い。

大正三年九月

編輯者 白

小 引

天理教は最も新しき宗教、最も活躍せる信仰を有せる宗教の一つである。今や其の信徒三百萬を超え、日本國內は固より、遠く歐洲文明の中心にまで其の教へが波及して居る。

是れまで天理教に關する充實した著書は世間に一もない。天理教内に於てすら完全なるものは未だ無いのである。斯かる時に當つて公刊するに至つた、此の書は頗る注目すべきものであらうと信ずる。

而して更に此の書の貴い所以は、廣池博士が十數年間研究の結果、
1 親ら體得せられたる信仰の告白であるからである。文の爲めの文で

は無いのである。

頃ろ法學博士の中に頗る異色ある三人がある。一は古神道を唱道せらるゝ筧博士、一は日蓮主義を絶叫せられる山田博士、而して廣池博士である。

三博士は皆な法學界の權威であること申す迄もないが、又た一面に於いては熱誠敬虔なる信仰の人である。而して近く日本に自發した精神運動の先驅者である。單に宗教信仰の分析的研究者鵜呑的紹介者ではない。潑々たる信念に生ける思想家である。

吾々は三博士を深く敬慕すると共に、所謂る哲學者、所謂宗教家、所謂倫理學者、所謂教育學者に望むところ頗る大ならざるを得ない。

今此の書に依つて、天理教の如何なるものなるかを世に紹介するは編者の甚だ光榮とする所であると共に、之を快諾せられたる廣池博士に厚く感謝する。

原文の眞意を害せざるやうに、便宜の爲めに、題目を附し、章節を設けたるは編者の私意である。或は罪を博士に及ぼさむことを恐れて、其の責任を明らかにして置く。

尙ほ此の講演は、「概論の概論」で、他日吾々は博士の大著に接するの日あらむことを待つ者である。

大正三年九月

て教徒と
観たるし
夫
理
教

法學博士
廣池千九郎述

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "廣池千九郎" and "法學博士" visible in the right margin.)

て教徒とし
て観たる 天 理 教 目 次

一 緒 言

天理教に對する非難——著者の位置

二 天理教の特質

天啓の教——天啓の意義——古代に於ける天啓——古代
法典に現はれたる天啓——人類の歴史——著者の研究的
事業——現代と天啓——著者の信仰に入れる動機

三 教祖の人格

天理教の起源——教祖中山ミキ子——生ひ立ち——浄土
 宗の信仰——慈悲の心——五重相傳——我が子を身代り
 に——倫理道德よりの批評——倫理の標準——倫理と宗
 教——神憑かり——シユン刻限——救済の天啓——物質
 上の救助——外圍の迫害——神人の間に——精神的救済
 ——天啓と教理の發達——御神樂歌

四 天啓の二面

天啓の現はれたる人々——飯降翁——天啓の二大別——
 「刻限のおさとし」——「伺ひ」——天啓と教祖の態度

五 天啓の内容

天啓の發表せられざる所以——教典と天啓——「御授け」
 ——誠の心、慈悲の心——現代の學問と天啓——天理教
 の本質——聖者と迫害——宗教の要——天啓と祈禱禁厭
 ——大祓と天理教の教理——日本建國の精神——天照大
 神——諸外國建國の精神——慈悲心と天啓——人格と天
 啓

六 天啓の性質

天啓と慈悲心——繼續的、訓練的——苦痛と天啓——「手
 引き」——苦勞、難儀せよ、努力せよ——時節到來——布
 教法——日本固有の信念との一致——人類全體に普遍す

る新宗教——教祖の日本に對する豫言——天理教と日本
——偉大なる日本

七 天理教の神觀

神は天地抱き合せの世界——神と人——汎神論——大宇宙、小宇宙——借り物——國體の本義と天理教の神觀——倫理的考察——宇宙創造——月日二柱の神——十柱の神——人類の發達——神は理なり——宇宙根本實在の普遍的神靈——無我の慈悲——「日の寄進」——大宇宙の慈悲——慈悲と人類——因果律

八 天理教の神と神道の神

造化三神——天つ神——根本神の性質——根本神の出現——現神あきつかみ——天理王之尊の守護——人類の總祖先——國家主義——天理人道

九 天理教の人生觀

自我の没却——慈悲の心——八つの埃——因縁——「日の寄進」の二面——消極的、積極的——天理教徒の特色

十 天理教と將來の社會

徳治的精神の政治——堯舜——歐洲の思想、民衆の自覺——自己の幸福——發展と眞正の自我没却——救世軍——推讓、慈悲、犠牲の精神——救濟主義の教育

天理教の現況——教祖の詠

教徒として觀たる天理教

廣池千九郎述

一 緒 言

天理教に對する非難——著者の位置

1
 天理教と云へば、今日まで世間一般の人は普通に、只だ踊りを躍
 るとか、或は男女混淆して變妙なる歌を謠ふとか、或は天理教徒と
 なれば祖先傳來の家産を蕩盡するものゝ如く考へられて、是れに對

する非難の聲が頗る喧びすしかつた爲めに、數十年の間廣く社會から認められず、一派として獨立することが出来たのも、漸やく明治四十一年の事である。

私は去る明治四十二年の十一月、或る動機よりして之を信ずるに至つた。其れから段々と其の教理や信者の信仰等を研究して、益ます信仰を堅くすると同時に、其の信仰に救はれて今日の境遇を得たのである。

二 天理教の特質

天啓の教——天啓の意義——古代に於ける天啓——古代法典に現はれたる天啓——人類の歴史——著者の研究的事業——現代と天啓——著者の

信仰に入れる動機

天理教の最も大なる特質を一言すれば、天啓即ち Revelation の事實が有つた事である。

天啓と云ふことは、古代より多くの書籍の中に在ること、神なるものが人間に憑かつて来て、而して其の人間に神の働らきをさせるると云ふ事である。即ち宇宙の法則及び之に本づける人事の法則を人類に示す爲めに、其の心事、行爲が天地神明に感通する人を選んで、其れに憑かつて來ると云ふやうな事を天啓と云ふのである。

古代民族の間に此の天啓があつた事は、種々の記録に遺こされて居る。私しの研究しつゝある法律學の方面にも、天啓の事實は随分

多く傳へられて居る。

世界最古の法典たるバビロンの Hammurabi の法典でも、印度の摩奴 (Manu) の法典でも、支那の洪範でも、皆な天啓から成立して居ると言ひ傳へられて居る。又た我が日本の建國も正しく天啓に本づいて居る。

斯くの如く、嘗に宗教や政治や法律ばかりでなく、古代の人類の歴史を見れば、總べての事が一に皆な天啓に依つて導かれて居ると思ふ。即ち人類は、古への宗教的時代よりして、今日の科學的時代に進むで來たのである。

例へば法律學の研究の如きも、歴史的研究を要するは必然のこと

で、私の専門として居る歴史法學も即ち法律學研究に缺ぐ可からざるものと成つて居る。

私は學術的方面から原始的宗教に就いて研究を始め、次いで伊勢神宮の事業たる古事類苑の編修に従事した爲めに、神道は固より、佛教、基督教も漸次に調べて行つて、終ひに天理教に觸れたのである。而して天理教が普通に謂はれてゐる宗教と頗る變つた所のあることを發見した。

今の世に於ては、天啓と云ふ事は唯だ書物に見えてゐるだけで、其れを事實として信仰し、又た其れに依つて動いて居る者は殆んど無い位である。言ひ換ふれば、天啓と云ふものは最早や信じられな

く成つて、歴史上に遺つてゐる天啓も事實では無かつたものゝやうに考へられて居る。

然るに單り天理教では天啓を信仰して、一同が其れに依つて動いて居る事は頗る注目すべきことで、私しが其の研究を始むるに到つた因も此に存在して居る。

始め私しは明治二十八年から伊勢大廟の方に奉職し、爾來神道に就いての研究を進めた結果、天理教の教理の優秀なることと、其の信者の敬虔なることに驚いて、自ら該教信者の家に寄寓し、其の後教會へ獨りで起臥し、専門學研究の餘暇には天理教の教義のみを研究した者で、遂に感ずる所あつて其の信者と成り、該教最下級の信

徒の一員として鞠躬如として信徒の義務を盡して居つたのであるが、一昨年大病に罹つて、其れが助かつてからは一層篤く信するやうに成つたのである。

三 教祖の人格

天理教の起源——教祖中山ミキ子——生ひ立ち——浄土宗の信仰——慈悲の心——五重相傳——我が子を身代りに——倫理道德よりの批評——倫理の標準——倫理と宗教——神憑から——シユン刻限——救済の天啓——物質上の救助——外圍の迫害——神人の間に——精神的救済——天啓と教理の發達——御神樂歌

天理教は今から七十七年程前、即ち天保九年、西曆では千八百三十八年に教祖中山ミキ子に神が憑かつて來て、其れから興つたもの

である。

教祖の中山ミキ子は、奈良の都から三里許り南、今の丹波市驛から十町餘り東に隔たつて庄屋敷(今の三島)と云ふ一寒村の豪農中山善兵衛と云ふ人の夫人である。

ミキ子は庄屋敷の隣村三味田に生まれ、十三歳の時に此の中山家に嫁いだ。而してミキ子は浄土宗の熱心なる信者であつた。中山家に嫁いでからは其の信仰が愈々深く成り、物を施し、人を喜ばすことが好きで、極めて慈悲の行ひが多かつた。斯くて十九歳の時には、浄土宗の五重相傳を受けた。

此の五重相傳は浄土宗では信仰の深く進んだ者に授けるので、其

の意義を簡單に言へば、心を誠にして佛の心を體する人に授ける信仰上の一儀式である。故に信者に取りては極めて大切なるものである。

ミキ子は十九歳にして此の五重相傳を受け、其れよりは慈悲の心が日に月に深く成つた。人を惠むことは何よりの楽しみで、家内の者は固より、村中の者を憐れんで慈悲を施し、人に交はり世に接するに一にやさしい心を以てした。

三十一歳の時の事である。ミキ子の預かつて居る隣りの庄屋の子が瘡癩に罹つて重態に陥つた。種々手を盡したけれども其の効が無い。其の時に教祖は、自分の子供二人の命を身代りとして差し上げ

るから、何うか此の子供を助けて下さい。若し其れで足りなければ自分の命も差し上げますと云つて、諸處方々の神佛に祈願を籠めた。ところが不思議にも其の子供は病氣が段々に快くなつて、遂とう元の身體に恢復した。そして自分の子二人は順を追うて間もなく死んで了つた。即ち自分の子供二人を棄てて他人の子を助けたのである。此の一事は甚だ奇怪に思はれるであらう。倫理道徳から云へば、餘りに偏よつて居るとも評せられる。倫理にも慈悲と云ふことは説くけれども、斯くの如き強いものではない、自他併立の間に於ける慈悲に過ぎない。正義とか、中庸とか云ふことが倫理の標準である。然し自他併立の出来ない場合には、身を殺して仁を成すと云ふ

ことが、東洋に於ける倫理の極致であつて、儒教でも又た我が日本固有の道徳でも(天照大神の御事蹟の如き)、二宮尊徳の主義でも、武士道でも、終極は同じことである。斯う成ると、倫理も其の積極的部分は矢張り宗教と同じ意義を有してゐると謂はれる。

西洋の或る倫理學者の説に、宗教は慈愛を標準とし、倫理は正義を標準とする、と云ふやうな事を述べて居るが、西洋歴史を繙いて見ると、古來偉大なる事業は皆な己れを棄てて世の爲めに盡した人々に依つて成就せられて居り、社會の状態を見ても實際上に於いて斯くの如き無我の勇者を賞讃して居ることは、東洋と敢へて異なる所は無い。

今茲に宗教と倫理とを比較して手短かに判断するのは至難の事であるけれども、實際上に就いて之を觀る時には、凡べて倫理の教へや、今日の所謂學校教育が人を感化し指導する力の弱いのは、其の根本の立場が中庸とか正義とか云ふ所に在ると考へられる。即ち其の指導者が中庸の位置に立つて正義位のものを行つてゐるのでは、其れに教へられ導かるゝものは中庸にも至り得ず正義も行ひ得ないのは當然の事である。殊に指導者自らが中庸以下に立ち正義以下を行つてゐる者の如き現代に於ては、倫理の教へや學校教育に人を導く權威勢力の乏しきは言ふまでもない事である。中庸、正義が悪いと云ふことは固より誤まつてゐるけれども、是れのみでは満

足し得られぬ、其處に宗教の必要なる所以が在ると信ずる。

天理教祖が他人を救ふ爲めに我が子を棄てた行爲は即ち宗教的の慈悲であつて、區々たる利害の問題を超越したる英雄的行爲として見るべき價值がある。倫理から之を冷やかに批評する如きものでは無いのである。

教祖は其れより十年後、四十一歳の時に神憑かりがあつた。其の十年の間に慈悲の心が愈々益々進むで來たのである。

其の天啓は、第一はシユン刻限と云つて、即ち時節が到來して、宇宙根本實在の神が此の人類を今一段と向上發展させる爲めに、無我の慈悲心に位する教祖の體内に入り込むで來たことを啓示したの

である。而して其の神の實質は十柱から成り立つて居つて、此れが一柱づゝ順々に其の神名と其の働きとを示されたのである。

次に、中山家の家倉田畑を賣り拂つて了つて貧しき者を救済せよと云ふ天啓があつた。其こで教祖は遂に家倉田畑を全然賣り拂つて人を恵むた。物質上の救助をした。此の時には中山一家は承知しなかつた、親族に於いても左様であつた。然し神の命令は遙かに強いので、教祖の心が少しでも撓めば其の身體に苦しみが生じた。茲に於いて教祖は神と人との間に挾まつて進退谷まり自殺せむとさへ決心したけれども、遂に此の難關を切り貫けて物質的救済より更に精神的救済に進むた。有形の救済より無形の救済に移つた。其の間

の事蹟は分明して居るけれども、長きに亙るを以て略しておく。兎に角、天保九年より約三十年の間、教祖は一物も無き貧者と爲つて、家族各自は辛やく勞働に依つて衣食の資を得たので、誠に慘憺たる生活を送つた。けれども教祖は不屈不撓ひたすらに人心救済に心を入れて毫も倦む色が無かつた。其の徳は果たして空しからず、信徒は日を逐うて増加し、文久元治の比に至つては斯教盛運の曙光が既に仄かに見え初めたのである。

當時の教へは今日より觀れば極めて單純で、深遠なる教理の啓示は未だ無かつた。ところが慶應より明治の初めつ方頃から、天啓に依つて今日の偉大なる教理が出来た。

此の教理は即ち御神樂歌と稱するもので、世には之を踊りとして嗤笑する者も有るけれども、其れは時代の風俗に随つて行るから爾かく見えるので、天照大神が天の岩戸に御隠れに成つた時の神樂も同じ事である。

此の御神樂歌を能く研究して見ると、天理教の根本教理が皆な之に籠もつて居るので、最も大切なるものである。

是れ等は孰れも明治十年過ぎ頃までに大抵一と通り天啓に依つて出来、其れより引き續いて必要なる天啓があつて、教祖は明治二十年陰曆正月二十六日に九十歳の高齡を以て歿せられた。

四 天啓の二面

天啓の現はれたる人々——飯降翁——天啓の二大別——「刻限のおさとし」——「伺ひ」——天啓と教祖の態度

天啓の現はれたのは、教祖と教祖の末子小寒子と門下の飯降伊蔵との三人である。而して明治二十年一月教祖の歿後は専ら飯降翁に天啓が下つた。翁には其れ以前にも天啓があつたけれども、教祖歿後は翁一人に依つて天啓の詞を聴くことになつた。然るに翁は明治四十年六月九日に歿した。天保九年から明治四十年まで七十年間繼續的に天啓があつたのである。

試みに其の天啓を大別すると二つに成る。一つは「刻限の御さと

し」で、も一つは「伺ひ」である。

「刻限の御さとし」の刻限とは時節の意で、而して此の天啓に亦た二つの別がある。一つは將來の豫言で、斯く／＼の場合には斯く斯くの事が起ると云ふやうな事、一つは時節が到來して神が人類を救済すること、斯くては人間が困るから斯う云ふ風にすれば宜しからうと云ふやうな、神の默示として發する豫言の天啓である。

「伺ひ」とは、人から神に向つて、斯う云ふ事は何うしたら宜しからうかと、神意を伺つた時に發せらるゝ天啓である。

然らば天啓の降る時の教祖の態度は何うであつたか。此れは宗教の研究上にも亦た學問上でも參考に成ることと思ふ。此の天啓の事

實に就いては色々手を盡して調べたので、有らゆる天啓内の各階級に就いて調べた。管長役員或は末々の信者に就いて、何う云ふ風に之を教へて居るか、又た信者は何う云ふ風な様子に信仰して居るか、學問上の研究と同様にして取り調べた。中々一と通りの事では信用出来ないで、天啓教内でも利害關係等の異なつた人々に就いて詳しく調べ、一方には記録に徴して其の跡を尋ねた。其の結果として私しの信仰の萌芽が發生し、進むで自ら經驗して之を確信するに至つたので、茲には唯だざつと形式上の概略を述ぶるに止まる。教祖より神に求むる場合には、教祖は少しく容を正すといふ風で直ちに神の意思を感得せられたと云ふ。然し之を今日の所謂精神

統一と云ふやうな事と同一に考へるのは誤まりである。精神統一は一の技術である。天啓は神人一致の慈悲心の充實した結果である。又た神の意思に基づく刻限の御諭しの場合には、多くは教祖の音聲氣分若しくは肉體の様子と異なる状態（其の状態は凡人の欠伸の如きもの）に於いて憑かり來り、若しくは又神の命令を用ゐざるが如き場合には稀れに教祖の肉體の苦痛、若しくは疾病の状態に於いて憑かり來つたこともあつた。是れ等は何れも實見者の直話である。飯降翁の神憑かりも大略は同一で、刻限は病氣の時が多かつたやうである。而して概して言へば刻限は先づ無意識状態の如くなつたやうである。

五 天啓の内容

天啓の發表せられざる所以——教典と天啓——「御授け」——誠の心、慈悲の心——現代の學問と天啓——天理教の本質——聖者と迫害——宗教の要——天啓と祈禱禁厭——大赦と天理教の教理——日本建國の精神——天照大神——諸外國の建國の精神——慈悲心と天啓——人格と天啓

天啓に現はれたる言葉の内容は、是れまで極めて深い信仰を懷いて居る人々の間にのみ語り傳へて居るので、社會に弘く發表することとは避けてあつた。其の故は、第一には無智蒙昧なる淺き信者が之を誤解して弊害を醸したことがあつたのと、第二には世俗の人々が天理教の真相を知らずして妄りに之を迷信邪説として迫害するのと、第三には信者の外は勿論諸信仰の眞意義を認めないのが當然だから

ら、之が爲めに天理教の倫理的方面の教へだけを世に公けにするやうに外部から勧められて遂に教典などを作るに至つたので、天啓の内容は特に斯かる事情で社會に知らさなかつたのである。

教典は倫理的方面の發表であつて、固より教理に本づいては居るけれども、天啓そのものの内容が明白に現はれて居らないのと、其の書き方が又た不自然なるを免かれぬ點がある。其こで世人は往々天理教には秘密書典があるやうに云つて居るが、別に秘密では無いけれども、天啓の言葉を筆記したものが各所の教會に間々傳寫せられて居る。此れ等の事實を綜合して研究しても天啓の事實は能く分かる。

其れで只今「御授け」即ち授訓と云つて、天理教の最高信者たるの資格を認められた者に授くる一つのしるしがある。此れも矢張り元は秘して居つたもので、官權から之を見たいと云へば言ふ程恐れたとの噂である。然し之を取り調べて見ると實に立派な事が記してあるので驚いた。尤も平假名で極めて拙づい文章で、之を修辭學や文法から觀れば瑕疵百出のものであるけれども其の意味は頗る深長高遠なるもので、大宇宙の眞理に外ならない。私しも順序として之を受けて居る、誰れに見せても決して差し支への無いものである。併し今まで斯やうに秘して居つた爲めに、外部の者は猜疑の眼を以て之を迎へ、内部の者は亦た世人に對して用心して居つたので

ある。

天啓の内容は極めて單純で、一口に言へば、誠の心に成れ、慈悲の心に成れ、一と筋心に成れ、と云ふ一事に在る。如何なる時、如何なる事に向つても之を以て其の解決を與へて居る。世俗の宗教や又は賣卜者の如くに、方位若しくは日時きちじの吉凶きつきょう、失せ物の場處ばしよの指示などに類することは一つも無いのである。宇宙根本眞正の神の揭示であるから、怪しいなどと云ふ事のあるべき筈は無い。是れが學究徒としての私わたくしの信ずる所以である。

太古蒙昧の時代は所謂宗教的時代で、人格的なる神の意思を唯一の力と見て、一切の事は皆な神意に依つて左右せらるゝものと信

ずる時代であつた、神にさへ縋れば助かると想像して居つた。今日こんにちは所謂科學的の時代で、想像や理論を離れて實驗的の基礎の上から原因結果の關係を觀て事物の判斷をする時代である。故に天啓の内容と云つても、若しも其れが天理に反し、自然の法則に戻り、又た人事の規範に逆らつてゐるものならば、私わたくし一個として信じ難いものである。天啓の天啓は、此の點に於て、尤も人類の進歩に伴うて發達すべき性質を有して居り、文明的新宗教の本質を具へて居ると信ずる。

天啓は斯かる天啓の上に立つ宗教であるけれども、天啓と云ふことが新らしく聞ゆる爲めに、世俗の之を誤解し易いのは亦た已む

を得ぬことである。併し天理教は本来、眞ことの宗教で、誠を行ふ宗教で、我が身を苦しめて人を助け世を益すると云ふ教へであるから、教祖の親族は勿論、其の家族の中にも此の教理を聞き分けることが出来ない者も多かつた。此の事は、キリストが聖母マリヤにすら狂人視せられ、孔子は陳蔡の野に飢ゑ、釋迦が外道に苦しめられた事蹟に徴しても怪しむに足りない事で、高絶偉大なる事業に迫害の伴なふのは人生の常である。是れ無くむば人生に或は艱難苦勞は無いであらう。其こが又た宗教の必要なる所以、安心立命の必要なる所以である。

天理教の天啓が従來の禁厭祈禱などとは全く違つたものであるこ

とは曩にも述べたが、古代の大祓を讀むで見ると、更に能く分かる。此の大祓には天理教の教理がそつくり現はれ居つて、又た天理教の教理を以て此の大祓を解することが出来る。即ち伊弉諾尊の禊の修行に依つて三貴神が現はれ、其の三貴神中の最高神たる天照大神が更に天の岩戸の御修行を遊ばされて、其の結果が我が日本帝國の建設と成り、統一と成り、而して天照大神の日本帝國の國祖と爲り、萬世一系の皇室の御先祖と仰がれ給ふやうに成つた原因も此に在るので、我が國體の精華は其の實は天照大神が我が身を捨てて世を救ひ給うた無我の大慈悲心、歿我の犠牲的觀念に存するものであると云ふことが出来る。今日までの國學者は、古典の眞意義を活かすべ

き精神が無いので、斯くの如き事が分からなかつたのである。曾て之を先輩井上頼因翁に話した所が、非常に賛意を表せられた。今私しが天理教を信じた眼を以て古事記、日本書紀などを讀むで見ると、古代を活かして見る事が出来るやうに思ふ。日本の今日あるのも此に在ることが分かる。

其れから支那、西洋の建國の事蹟を調べて見ると、建國創業の偉人の行動は皆な天理教と一致して居ることを知つた。即ち己れを棄てたる心事の上に大業を築き上げられて居る。

されば天理教の天啓は、教祖の精神統一で出来たものでもなく、又た無念無想とか無感覺作用とか云ふ事からでも無い。祈禱や氣合

や催眠術やプランセットや狐狗狸や占術やなどの方術である、技術である。故に之は悪人でも出来る、悪心を以ても行ひ得られる。

天理教の天啓は偉大なる宗教的事實である。教祖は

術やとて法がえらいとおもふなよ、こゝろのまことこれがしん

じつ

と云はれたことが有る。慈悲の爲めには己れを捨て我が命を棄てても進む。此の慈悲心の深かつた爲めに天啓が降つたのである。教祖が十九歳の時に五重相傳を受け、三十一歳の時に我が子を他人の子の命代はりにしたと云ふやうな事は、吾々の如き慈悲心の乏しい者には到底出来かねる偉大な心事、行爲であるけれども、其れでさへ

猶ほ天啓がなく、其の後の十一年の長き訓練を経て四十一歳の時に漸やく天啓が顯はれたのである。其れでもまだ初め頃の天啓は比較的單純なものであつて、其れから次第に教祖の慈悲心が進み、信者の心も進み、教勢の發展するに随つて段々に複雑高尚なる新たな天啓が續いて現はれ、遂に今日の教理にまで進むのである。即ち天啓は一通りの慈悲心位なるものに起る事でないと思ふ。而して教祖の歿後は彼の飯降翁に引き續き神憑りがあつて、四十年六月九日に翁が歿するまで前後七十年間天啓の事實があつて今日に及むたのである。

俗間に往々唱へられる、天理教には他に一種の顧問があつて教理

を作り出したと云ふ事は斷じてないので、教典や或は形式的のものだけは従來其れ等の助力に依つて成つたものであるけれども、其れは却つて天啓の事實を蔽ふやうな事をしたので、眞正の教理の上から觀れば大なる價値を付與すべきものでなく、只だ世俗の分らない者に向つて教理の形體を示す爲めのものたるに過ぎない。故に天理教の凡べての教理は全く人間の仕事ではなくして、無我の状態に在つて天理と一致する教祖を通じて現はれたるものである。

斯くの如く、天理教の天啓なるものは、教理の人格を通じて現はれたものであるから、其の事柄が皆な宇宙の法則は固より人間の法則にも一致しなければならぬものだと思ふ。若し之と背馳するが如

き事があれば、此れは眞の天啓では無いのである。

六 天啓の性質

天啓と慈悲心——繼續的・訓練的——苦痛と天啓——「手引き」——苦勞、
難儀せよ、努力せよ——時節到來——布教法——日本固有の信念との一
致——人類全體に普通なる新宗教——教祖の日本に對する豫言——天理
教と日本——偉大なる日本

次ぎに天理教の天啓が合理的であることを證して見よう。

第一には慈悲の心のある人に現はれたと云ふことが合理的である。彼の從來俗間に在りふれたる所の「拜み信心」は論ずるに足らざるもので、文明の宗教は正に天理教の如くなるべしと思ふ。

第二には其れが一時的でない、繼續的、訓練的で、即ち教育的で

ある。假令ひ教祖自らは神の導きたるものなるにもせよ、之を人事の法則より言へば、訓練を積むで其の偉大なる人格が出来たのである。天理教の幹部の人々は勿論、末々の信徒でも、學問もなく教育もなき者が、能く心を治めて居るが、此れは皆な多年信仰上の訓練を経て茲に至つたのである。私し自らの事を序でに述べると、只だ單に偶然に俄かに信仰に入つて今日の状態と爲つたやうに思はれる方が有るかも知れない、然し決してさうでない。六ヶ年前から信仰に入つて、次第に天理教に於ける信者としての種々様々の訓練を経て、或は寒村僻地の民家にも赴き、個人救濟までもして、自ら心を治むる修行を積んだのである。其れでも本部に入つて數百萬人の信

徒の目標と成る資格は固より無いのである。所が一昨年九月から重症に罹つた時は、會長が「これは神の御手入れである。貴下は何うしても本部に入つて働かねばならぬ人である」と言はれたので、私も種々懺悔の末深く覺悟する所があつて、爾來本部に勤務し、病氣も直つて今日に及んだのである。今日私は自分の一切を捨てて居る事は勿論であるが、眞に教祖の足迹を履んで行くことは到底至難の事で、私しなども天理教の眞の心使ひ眞の行ひがし度いと日夜苦心修養して居る。天理教の信心は斯やうな次第で、實に全く學者の學問上の研究修養と同一性質のものやうである、此の一事を以ても天理教の信仰の價値は分かると思ふ。是れが一時的のもので

あつたならば、其れは所謂の山師である。狐憑きや方術は一時的のもので、是れ等は人を助け世を救ふ爲めに深い慈悲の心から多年の苦勞艱難を積んだ結果として出來たものでは無く、従つて其の價値を認めることは出來ないのである。之に反して天理教の教祖は慈悲の心を積んで來たと云ふ訓練の上に、立派な天啓がおこつたので、此れが天理教の信心の本と爲つて居るから、合理的であると私しは考へる。

第三には苦痛を以て人間を強制する。教祖が天啓通りに實行しないと簇病状態になる、其れを見兼ねて家人は田地を賣り家倉を賣つて慈善費にする事を許される、之が亦た合理的である。抑も人間

は肉體上の苦痛が無ければ到底眞の遷善悔過をしないものであるから、斯くの如き感化法は恐らくは自然の法則であらう。古人も、正義は逆境に行ひ易く不正は順境に起る、と云ふやうな事を云つて居る。されば今日天理教では主として信仰を苦痛から導いて居る。爾うなると世間では、天理教は病を直はす宗教である、と云つて居るけれども、其の眞の目的は決して爾うでは無いのである。彼の千八百六十六年米國に於て Marg Baker Eddy 夫人の創唱に係る所の Christian Science は Healing Religion (治療的宗教) 若しくは Mind Cure (精神療法) の宗教と云ふやうに謂はれて、英國などでは天理教が是れと並び稱せられて居るさうであるけれども、天理教は天

啓に本づいて人類の心の立て換へを爲さしむるのが其の目的であるから、世上に云ふ治療的宗教又は精神療法などとは全く異なつて居る。此の點は極めて重要な所で、世俗の人は往々輕卒に之を誤解して居る、其れは目的と方便とを混じ、又た其の方便の性質を從來の方術技術の類と混淆して視て居るので、甚だしい間違ひである。素より絶對の神の力を認むることは言ふまでも無い事であるが、心次第と云ふ事を其の信心の原則として居つて、神の守護は、其の人の過去の因縁だけと、其の人の今後の決心と行爲の結果だけとに比例するので、心の立て替へをさせて心の病ひを直し、因つて以て世の立て替へを爲し、斯くて黄金世界を造り出すのに在る。而して其の

肉體の病ひは心の病ひから起るものであるから、肉體の病ひは其の心の病ひを直す機會であつて、肉體の病ひは以て慈悲の心を起さずるに適する一つの善い時機であると天理教では見るので、其れ故に肉體の病ひをば神の「手引き」「手入れ」「仕込み」などと稱するのである。但し、或は煩悶して居る人、不平を懷ける人、不幸なる人、皆な心の病ひから來たものであるけれども、此れらは肉體の病ひの如くに痛切に人心を刺撃せないものと見えて、其の煩悶不平が消えて了ふと神を求めなくなる。故に煩悶者不平家不幸者などの信仰は永く繼續しない。多くは其の途中で變つて了ふ。深い信仰に入つて心を立て替へるなどの事はむづかしい。況してや是れまで失職者や

社會の落伍者にして天理教の盛大を見て入つて來た者などは、皆な駄目であつた。獨り身體上の經驗から信仰に入つて來たものは永くして居る、且つ深い信仰に進むで居る。此の事は天理教に於ける過去七十年の間の事實であり、又た私しの親しく經驗し見聞した所である。

第四には天理教の天啓は苦勞せよ難儀せよ、而して人の爲め世の爲めに能く働けと云ふ。此れが合理的である。即ち古今東西の倫理教育の教へと全く一致して居る。宗教の教訓としては異例であると思ふ。救濟と云ふ一方に努力を重んじて居るのである。努力しなければ信仰の生命が無いので、總べての職業職務に努力しない者まで

無暗に救済する事は決して爲ない。要するに努力と云ふものが、絶
 絶服従の意味の外に信仰の生命と成つて居る。

第五は時節が到来して天理教が開かれたと云ふ事である。此れは
 他の宗教に對して或は不遜に聞えるかも知れぬ。所謂る刻限が到来
 して中山ミキ子に神が憑かつて而して天理教を開いた。其の中山家
 の屋敷を御地場と云つて、宇宙根本の神の鎮座地、世界人心救済の
 根本地であると云ふので、人の心が進むで黄金世界に爲れば此處に
 甘露臺が現はれると云ふのである。併し此れも強がら不遜の言では
 無い、合理的であると思ふ。抑も世界中で如何なる民族も原始時代
 から幼稚ながらに宗教を有つて居る。處が人智の進むに連れて、其

れ、其の民族に應じ又た世界の一般人類の狀況に應じて進歩し
 た宗教が現はれる。即ち佛教の如きキリスト教の如き偉大なる宗教
 が起こつて來たのである。後には回々教もおこつて來た。而して此
 れ等の各宗教の間に於ても、時勢に應じ國狀に隨つて變化し改革せ
 られて居る。キリスト教などに於ても古代と今日とは教理が變つて
 居る。斯う云ふ風に段々と改良を加へて來るのが即ち時節到来であ
 る。是に到つて天理教が起こつた、所謂る時節到来でおこつた、其
 れで天理教は人心救済の最後の教へであると云ふのである。此れが
 他の宗教に對して不遜と思はれるであらうけれども、併し矢張り合
 理的である。何れの宗教も其の立場は皆な斯くの通りであるので、

獨り天理教のみでは無い。

第六は天啓からおこつた天理教の布教法である。是れ亦た天然と人事との法則に一致して居ると思はれる。天啓に依つて教祖が自分の生命財産自由を捧げてやつたのがある。最初は教祖一人でやつて、其の勢力を得ない間は轉軻不遇にして非常に苦しんだ。其れから門人が因縁を聞き分けて、成る程自分の過去に於ける心事行爲を顧みると、慈悲の心使ひと慈悲の行ひと云ふものが無い。此の心使ひが良くないから或は大病に苦しむとか、或は不幸に陥つて悩むとか、さう云ふ事に氣付いて信者になり、其れから自分の生命財産自由を神に捧げて人心を救済することを思ひ立つ。斯くの如くにして天理

教の教師と云ふものが出来、續いて教會が出来たのである。一般の教師は皆な斯くの如く自ら進んで教師と成つて布教に従事して居るのです。普通の信者は只だ心使ひを従来より改めて職務家業に相變らず勵精して居りますのみですが、教師は右の通りです。其こで天理教に入ると財産を蕩盡すると云ふ非難がおこつて来る。成るほど一寸考へると左様に見える。然し教會設立の順序方法を熟く視ると分かることである。例へば最初に熱心な人が五六人も集まつて、私財を寄せて一つの教會を設立すると假定すれば、縦し教會堂は出来ても斯かる勢ひでは段々に維持がむづかしく教師も衣食に困るやうに成る。是れでは行り切れないと云つて信仰を變じて教會を脱し、

再び元の俗社會に戻る者も少くない。其れに惡漢が混入して愚者の財産を横領した事もあらう。斯様な狀勢から見ても、天理教を信仰すれば財産を蕩盡する、此れは捨て置かれぬと政府でも干渉を始め。斯くの如きは已むを得ぬ事であるが、詰まり爾う云ふ人々は薄志弱行の徒で、半途にして挫折したのである。教勢の發展から見れば遺憾であるけれども、却つて其の爲めに不純なる分子を除く事が出来たと謂つても宜い。然し其れ等の人々は天理教全體の幾百萬人中の僅かな指を屈する位な人數で、殊に斯かる事件は教導職以上の者の間に起り、普通の信徒の信仰は全く其れとは異なつて居るから、此れが爲めに國家經濟や國民道德を紊るやうなことは決して無いと信

する。世間から是れ等の事實に對して非難を受けたに就いては、本部に於ても非常に恐縮して取り締りを嚴重にして居る。元來天理教は努力の教で、現に眞の信者が府縣や斯民會から續々表彰せられて居る位だから、國家の爲めに憂ふることは無い。而して此れ等の場合に於いて、信念の鞏固なる教師は斃れて後已むの決心を以て、事實餓死するやうな悲惨な境遇に陥り、着るに衣なく喰ふに食なき迄の艱苦に堪へて今日に及んで居るのである。されば今日三千の教會に於ける會長役員等は、此の千辛萬苦を経歴して來つた靈界の勇者である。其れ故に學問もなく才智もなき人でも、皆な崇高純潔な人格を保持して居る。私しが天理教を敬慕する動機の一つも茲に

在る。さう云ふ風であるから、人に寄附金を募るとか、合力を乞ふとか云ふ事は、天理教では一切嚴禁して居る。宇宙の道理、人事の法則は左様であると思ふ。キリスト教などでも、十二使徒時代の布教法は斯様であつた。随つて當時に於ては其の教へに活々した生命が在つたのである。今日信仰の上から觀て、報酬を取ることは出来ないのかと云へば、決して爾うではない。神は人類の進歩發達を希ひ、人類は生存して行くべきこと勿論であるから、其の階級に應じ身分相應に衣食することは少しも差し支へないのである。只だ幾ら呉れなければ働かないと云ふ如き事、又た自ら進むで強ひて俸給を要求する事は、天理教には認めない。随つて會社の職工などが賃錢

増額の問題を擔ぎ出して同盟休業を惹き起すことなどは固より無い。何人も我が生命さへ保たれ、ば無報酬でも働させようと神に誓ふのである。併し土を食ひ水を飲むで、即ち特に左様にして遣つて行くことは出来ないから、衣食の料を支給されることは、如何なる處に勤務奉職しても差し支へは無い。宇宙の法則、自然の法則が此にあらうと考へる。權利を主張するとか、自ら威嚴を張るとか、自ら意見を立てて争ふとかすることが果たして自然の法則であらうか。元來人が權利を與へて呉れ、人が意見を立てさせて呉れるやうに、自ら徳を積み身を修むるのが天理であらう。故に天理教では自ら徳を積み慈悲を行つて行くのみで、決して自ら權利を主張しない、

自ら意見を立てない。ただ自然に之を人が與へて呉れて始めて成り立つと云ふ教理である。即ち日本に生まれて始めて日本臣民の権利は與へられ、一定の年齢と一定の財産を得て帝國議會の選舉被選舉の權得、金を貸して債權者と爲る人が出来るので、總べて自ら先づ務めて後に權利は得られるのである。威嚴の如きは勿論の事である。第七に天理教の教理は古事記、日本書記などに現はれて居る所の日本固有の信念と一致して居る。天照大神が天の岩戸に籠り給ふたのは、敵が色々の迫害を加へるので、此れは自分の不徳の爲めである。引つ込んで徳を積み人格を高むる外は無いと云ふので、天の岩戸に籠り給ふたのである。即ち敵が迫害を加へるのを皆な自分自ら

の罪に歸して、自分から身を引つ込むと云ふ、是れ程謙遜な、是れ程犠牲的な精神は誠に比類ない事である。其の偉大なる犠牲的觀念の貫徹した結果が我が萬世一系金甌無缺の帝國の建設と爲つたのである。此の精神が第一に全く教祖の精神で、其の低き優しき行爲は兩者符節を合するが如くである。且つ又天理教の根本教理たる借物の理、因縁の理などは皆な古神道と一致して居る。學問をせず、古典に明らかならざる教祖の口から斯かる教理が出たのは、是れが即ち天理教が天啓の教へである事を立證するものである。而して教祖は日本人であるが故に、日本民族本來の信念と一致するのである。然し決して我が日本民族の祖先の間に發生した古代の自然教その儘

のものではなく、又た素より所謂日本一民族の祖先教ではないので、正に人類全體に普遍的な性質を有して居る新宗教である。而して斯かる新宗教が日本民族の間に天啓を受けて出来たと云ふ事は、日本人に取つては大いに考ふべき事と信ずる。換言すれば、何故に東洋の一孤島たる日本の民に天啓が降つたか。今日までは印度、猶太、亞刺比亞等に於て天啓が現はれて居るが、此の度何故に日本に天啓が現はれたか。之を徐ろに研究して其の眞義のある所を考ふるならば、餘程偉大なる事があらうと思ふ。古事記、日本書紀の信念に就いて其の委しき事は略するが、兎に角、我が日本帝國と云ふ國には或る偉大なるものが存在して居るに相違ないと考へる。天理

教祖の豫言に、

日本見よ、小さいやうにあるなれど、根があらはれたら恐れ入るぞや。

とある。日清日露の戦役の結果から考へても、亦た學者の研究した所から考へても、大陸の諸人種のみが偉大であるとは謂はれない。茲で我が日本民族に關する深大なる研究が必要に爲るのである。彼の算法學博士の古神道の研究なども頗る重要なる有益あるものである。彼ると信ずる。何うしても日本に斯かる人類歴史上に偉大なる天啓の宗教を出したと云ふ事に就いては、人類として就中日本人として最も研究すべき重大なる問題である。想ふに、伊弉諾尊の禊の御修行、

天祖天照大神の天の岩戸の御修行、神武天皇神功皇后諸英主の天啓
 接受、萬世一系の皇室、金甌無缺の國體、並びに我が國民の純眞高
 潔なる品性、勇武素朴なる風習、乃至其の周密にして模倣性に富め
 る頭腦、是れ皆な注目すべき問題である。而して其の尤も主要なる
 事として私しの認めて居る所の伊弉諾尊の禊、天祖の犠牲的觀念は、
 支那や歐洲の如き少數なる英雄の政略的技巧ではなくして、此れが
 日本民族一般の所謂る民族性である事は、禊と云ふ事が當時一般の
 風俗であつたと思はれる事、並びに天祖の天の岩戸籠りに就きて國
 民の同情せし有様からして斯く考へらるゝのである。然る時は日本
 民族と云ふものは中々偉大なるものである。此れが明らかになれば、

天理教の天哲が日本人に現はれた事も、宇宙根本實在の神が日本人
 の肉體を假りて現はれ以て全人類救済の福音を降すと云ふ事も明白
 に成るのである。兎に角、人類最後の天啓教が日本に現れたと云ふ
 事は、日本民族の自覺すべき一大事件で、日本人に何か偉大なる成
 分の存する事を暗示したものと考へる可きである。私は前にも述
 べた如く、幸ひに前後十九ケ年間も神宮に奉職し、専ら東洋の事を
 研究するを得ましたから、之を基礎として今後天理教で高等専門の
 學校を興した曉は、内外の學者と共に廣い意味を以て公平に斯く
 の如き大問題を研究したいと思ふ。

七 天理教の神観

神は天地抱き合せの世界——神と人——汎神論——大宇宙、小宇宙——
 借り物——國體の本義と天理教の神観——論理的考案——宇宙創造——
 月日二柱の神——十柱の神——人類の發達——神は理なり——宇宙根本
 實在の普通的神靈——無我の慈悲——「日の寄進」——大宇宙の慈悲——
 慈悲と人類——因果律

天理教の神観に就いて極く簡單に述べると、天理教で云ふ神は、
 教祖の言葉によると、「神は天地抱き合せの世界で、吾々人間は天を
 父とし地を母とし、吾々は親様の肉を食ひ、親様の懐ろの中に生き
 て居る。又た死しても茲に居るのである。」と示されて居る。即ち宇
 宙は神の肉體であると云ふ一種の汎神論 (Pantheism) と同じやうで

ある。随つて人間は宇宙の一部分であるから、歐洲の哲學者の云ふ
 如く、宇宙に對して人體をば之を小宇宙と稱する事に成る。其こ
 人間の身體は神のものであつて、自我即ち人間は其の小宇宙に宿つ
 て居るのであると云ふわけで、人間の肉體は之を「神の館」と申し、
 又た之を「借り物」とも申すのである。

而して我が身體が我がものでないと云ふ事は、第一に我が國史の
 成績に本づける我が國體の本義と一致する。即ち我が生命財産自由
 は宇宙根本の神のもので、祖宗の大神のもので、又た陛下のもの、
 國家のものである。

帝國憲法第二章に臣民の權利が許されてあるけれども、其の憲法

たるや欽定であつて、其の改正も勅命に依るべき事と成つて居る。

第二に倫理的に考察しても、吾人は宇宙の一部分で、人類の一員であるから、我が身體を我れ一人の我が儘に使用することは出来ない。何となれば吾人人類に幸福は社會の御蔭、國家の御蔭であるからである。若し一人孤立せば人生何の楽しみが有らうか、又た何の價値が有らうか。名譽も利益も之を與ふる人無くむば何等尊ぶべき價値は無い。且つ一人孤立すれば自ら勞して衣食せねばならぬ、是れほど貧しい淋しい哀れな生活はあるまい。故に人類は相互の持ち合ひ助け合ひで、楽しみもあり價値も出来るのである。其こで人様を大切にせねば成らぬ。是れが天理教の教理の出發點で、自我を没

却して人の爲め世の爲め國の爲めに盡さねばならぬと云ふ教への基
づくところである。

天理教の宇宙創造説は、「最初暗黒の中に月日二柱の神様が居られて相談せられるには、此の儘では我々も楽しみが無く、外々の者も楽しみが無い故、是れから宇宙を造り創め萬物を造り始めて、其れ其れに働かせ、陽氣遊山を見たいと云つて、他から又た八柱の神を引寄せ、其れに此の主旨を言ひ聞かせ、若し我々根本の二神を助けて此の大業を成就せば、萬物から神として尊ばせようと云つて、之を承知させて、惣名十柱の神が一體と爲つて、此の宇宙及び人類社會を造り始めたので、人類は始め泥海の中に在り、細菌蟲魚

禽獸の階級を経て五分から成長し、幾度も幾度も生まれ變つて今日五尺の人類に及むたものである。」と説いてある。其の暗黒と云ひ泥海と云ふのは、宇宙混沌蒙昧の貌を云ふので、月日の二神と云ふのは、宇宙根本男女の二神の事で、天理教では月は男、日は女と爲つて居る。是れは我が日本の古神道で、天照大神は女神であると云ふ信念と一致して居る。

尙ほ此の外に其の十柱の神の性質及び人類などの事を分かり易きやう比喻形容を以て動物の性質に當て、説明してある。是れ皆な記紀二典より支那の古傳説并びに Bible などに見えた古代傳説の書き方と同一のもので、只だ分かり易く説明する爲めにしたものである。

之を具體的に説明しようとしても説明し得べきものではないが、無教育のものは之を誤解して、天理教でも最初大分これを誤解して迷信を起したものが有つたので、今日天理教の本部では之を説く事を禁止してある。然し乍ら教育のある者が、正しく之を説明し、正しく之を會得する事は、何等少しも不都合の無い事と考へる。

斯く天理教の宇宙創造の説明は、最初の十柱の神が既に他の爲めに献身的に働いて、此の宇宙と萬物と人體との樞軸と爲り勢力と爲つて、無我の状態に爲つて働いて居る。此れが即ち神と爲り得ると云ふ理想で、我々は其の十柱の神の造りかけた館の中に宿つて居るのであるから、神の法則、宇宙自然の法則即ち天理に従つて活動し

努力して天功を助けて、宇宙及び人類社會の完成を成し遂げねばならぬと云ふ信仰である。

次に又た教祖は天啓に依つて、「神は理なり。」と説かれて居る。即ち宇宙自然の天理法則は神の勢力の現はれたるものである。是れが天理教の名の生じた所以である。此の故に天理教に現はれたる根本の神は、其の以前各民族を救済する爲めに現はれた多くの神々や、佛教の佛陀や、キリスト教の天上の唯一神や、儒教の天帝などと同性質のものであると考へられる。随つて天理教の天啓に現はれた神は、一部の人間や一局部の事業を保護するやうな彼の古代ギリシヤの Domestic Religion の神のやうな小さな偏狭な神では無い。又た

今日一部宗教家の説く所の、信する者をば助け、信せざるものをば助けぬと云ふやうな神では無いので、信じても信じなくとも守護して呉れるのである。然し乍ら信じて行つて而して神の立てた法則に適へば、不幸を回復し、又た今一段幸福に成る事が出来ると云ふのである。

天理教の神は宇宙根本の普遍的神靈である。所謂天理自然の法則の根本勢力とでも云ふべきものである。而して其の所謂天理とか自然の法則とか云ふものは、又た其の内容が如何なるものであるかと云へば、無我の慈悲である。

此の無我の慈悲の内容を述べると、第一が無報酬的勞働、之を天

理教では「日の寄進」と云ふ。即ち宇宙の萬有は無報酬で互ひに持ち合ひ助け合つて生存し活動して居る。例へば動物の害に成るものは植物之を攝取し、植物に不用なるものは動物之を吸収して生存し、又た水火温冷相合し相調和して萬物其の生成を遂ぐるが如く、一切の現象事象皆な斯くの如くである。是れ即ち人道の本となるべき天理の慈悲の働きである。第二には、晝夜間斷なき活動が天理に本づける慈悲である。例へば地球が日夜間斷なく太陽系を巡り、四季之に依りて生じ萬物因つて以て生成する如く、宇宙の現象事象一として寸時も其の活動を休止する事は無い。此の故に無我の連續的慈愛心に本づける間斷なき人類の活動が、天理に一致する方法であると

云ふ信仰である。是に於てか第三には、人を樂しましむる爲めに事物を始めかけたのは慈悲である。而して其の始めかけた仕事を我れ一人にて仕上げずして、衆と共に働きて心ある者に功を樹てさせ、其れをも神と崇めらるゝやうに仕かけて、遂に志ある者一同を働かせて其の最初の始めかけた宇宙及び人類社會の完成を仕遂げようとするのは、亦た大いなる慈悲に外ならない。随つて其の完成は進歩主義でなければならぬのであるから、天理教の慈悲には無我の活動が伴つて居るのである。此の故に天理教の教理は進歩主義進化主義と云ふ事を含むで居る事に成る。凡べて舊來の道德説は保守的退嬰的悲觀的であるけれども、天理教の主義は前の暗黒泥海の比喩を

始めとして、宇宙萬有は造り終られたのでなくて造りかけられたのであると云ひ、間斷なき自然の活動運行が天理であつて、之を理想として居るのであるから、即ち進歩主義で、且つ活動的努力的樂觀主義である。随つて其の所説は全く進化論にも一致して居ると云ふことが出来る。學問技術乃至道德の如き、幸福の如き、皆な進歩するものとなつて居る。天理教は實に今日の科學に一致し、又た人類の歴史に一致した宗教である。而して第四には、既に科學に一致し、進化論にも一致するやうな宗教であるから、其の人類の心事行爲が皆な原因結果の關係を以て進むで行くと云ふ信仰に爲つて居る。即ち天理自然法若しくは神意に一致する慈悲の心に爲つて慈悲の行

ひを爲すものは疾病不幸を減じ若しくは之を免かるゝと云ふのである。此の一事は宗教の信仰としては、古來世界に行はれ來れる凡べての宗教に卓越し若しくは少くとも其の最良宗教の信仰と相並ぶべき信仰である。併し之を今日科學的に實驗的に證明せよと云はば、其れは亦たむづかしい事もある。心理學生理學などでは心身相互の關係は既に見認せられて居るのである。其の上に天理教の天啓は、私しの積年の研究と經驗とを以て觀れば、甚だ合理的なものであることが明らかに成つたので、私しは一個の學者の立場からも、天理教の所謂因果律は大に信すべき價値のあることを斷言するに敢へて憚らない。若し假りに天理教で説く所の「積善之家有餘慶」積

不善之家有餘殃」の意味の因果律が全く排斥さるゝやうな事に成れば、今日の學校の倫理科の如きも根本から覆がへつて、隨つて我が國體の如きは勿論、凡べて今日世界の文明國に於ける一切の社會制度は急激に且つ無秩序に根本から破壊せられるであらうと考へられる。凡そ今日、科學の實驗的研究で證明し得られざる事件でも、人類の内の生活を支配し又た外的生活たる言論行爲を支配して社會國家の統制的機關たるものも尠なくなからうと思ふ。例へば風俗、習慣、禮儀、傳説、歴史、信仰、文學、美術等の如きものも皆な左様である。是れ等は今日の科學で一々其の理由を説明し得ざる事も多いけれども、何れも吾人人類の幸福を維持發展さする上には大切

なものである。況むや天理教の因果律は過去現在に於いて幾百萬人の人心を救濟し、併せて具體的に其の疾病若しくは煩悶不幸等を救治し又た救治しつゝあるに於ておや。以上説く所は天理教の神の本質であつて、其の信仰の因つて基づく所である。

八 天理教の神と神道の神

造化之神——天ツ神——根本神の性質——根本神の出現——現神——天理王之尊の守護——人類の總祖先——國家主義——天理人造

天理教の祭神が宇宙根本實在の神であるならば、其の神と我が日本固有の神との關係は如何であるか。之に就いて一言したい。

我國の古典に見えたる造化の三神、其の他國常立尊などの所謂太古草創の大神は、古典の中でも隱身の神も混つて居らるゝ位で、之を天ツ神などと稱して彼の皇祖皇宗の大神とは區別して書いてある位であるから、此れは素より宇宙根本實在の神を指したものと考へられる。然る時は天理教の祭神と我が國史上の天ツ神とは同一であると思ふ。即ち宇宙根本實在の神は宇宙の間何れにも充滿して、宇宙及び我々の身體を支持して居るもので、随つて何れの民族の祖先の太祖も此の根本實在の神であると考へても宜しい。而して皇祖皇宗の大神及び御歴代の天皇の如きは、或は根本神の時節到來して、人類若しくは或る一民族救済の爲めに出現せ

られたものもあるべく、又た人生の幾轉生間にも善き尊き因縁を重ね、其の善き尊き因縁の爲めに斯かる救世的大神格として此の世に生まれ出でられたものもあるべく、何れにしても凡人の企及し得ざる尊き因縁の方であるから、其の御生存中既に現神と申して生身の神様である。此の故に、吾人は人類として天理王之尊き御守護を受けて、此の身體が生存活動發達する事が出来、又た國民として祖宗の大神及び現神たる 天皇陛下の道徳及び法律上の保護を受け、之によりて以て我が生命財産自由の保證をせられて、斯く安全に幸福を享けて居る事が出来るのである。若し天理王之尊の御守護なくば、一瞬間にして死滅し、若しくは疾病状態と爲るのである。是れと同

じく若し祖宗の大神及び 天皇陛下の御守護なくば、我が生命財産
 自由は忽まちに暴人悪人猛獸蟲豸の爲めに蹂躪せらるゝのである。
 野蠻人には天理王の尊の御守護は勿論あるけれども、我々の如き天
 皇の御守護が無いから、現に悲惨な不安心な境遇に居るのである
 まいか。是を以て吾人は天理王之尊を信仰すると同時に、祖宗の大
 神及び 天皇陛下の鴻大無邊甚深無量なる恩徳を感謝して之に報い
 奉らねばならぬのである。是れ天理教の信徒が納税兵役その他國
 家公共の事業に奮勵する所以である。

併し乍ら天理教の祭神たる天理王の尊は、宇宙根本實在の神で、
 人類の總祖先であるから、天理教の所謂る國家主義は、他の偏狹な

國家主義とは大いに異なるので、日本一國だけの國家主義では無い。
 即ち前述の如き理由を以て、日本國民としては日本の皇祖皇宗の大
 神と日本の皇室と國家とに無限の尊崇と忠節とを捧ぐべきである
 が、是れと同時に、英國の國民は其の英國の創業の神若しくは偉人
 及び英國の皇室及び國家に對して無限の尊崇と忠節とを盡すべしと
 云ふ事に爲つて居る。且つ何れの國家にあつても其の國家保存發達
 の生命と爲り、若しくは其の國家の保存發達に必要な風俗習慣と
 云ふものがあるから、何れに於ても亦た篤く之を尊重して、其の國
 家社會の治安秩序と云ふものを重んじねばならぬ。と斯う天理教で
 は教へて居るのである。是れが人類の總祖先たる天理王の尊の定め

たる天理人道である。而して人類は國の内外を論せず、出來得る限り誠心誠意を以て平和の交際を結び、國家としても相互推讓して、人類として又た國民として各自其の天分の幸福を完うするやうに爲ようと云ふのが、天理教の國家主義である。此れは天理教の大切な特點である。

九 天理教の人生觀

自我の没却——慈悲の心——八つの埃——因縁——「日の寄進」の二面——

—消極的、積極的——天理教徒の特色

天理教の神觀に續いて、信者の信仰に就いて一言しよう。

天理教の神の性質、宇宙成立の性質、換言すれば、神觀宇宙觀が

如上の通りであるから、其の人生觀は、人類として生まれた者は、此の宇宙の法則に依りて自我を没却し、慈悲の心に爲つて天功を助け、勇み進むで自己の現在の境遇を如何なる事も喜むで日夜奮闘活動するに在る。

人類は、罪惡としては無いが、自由意志がある爲めに、八つの埃を積むで居る。此れが病氣や不幸の因と爲つて苦しむのである。而して其れが所謂因縁であるから、只だでは免がる、事は出來ないから、「日のきしん」をして此の惡縁と取り替へて貰ふと云ふのである。そこで「日のきしん」と云ふ事が天理教の信仰の表象になるのである。而して「日のきしん」とは、時を神に寄進する謂ひで、「時はれ

「金」であるから、努力でも金銭物品でも、之を我が名譽利益を圖る目的でなくして人を救ひ世を益する爲めに悦むで出し、而して之を神様に御供へする心で一切其の報酬謝禮を豫期しない事を云ふのである。

第一に消極的方面の「日のさしん」に就いて云へば、例へば從來は自分の子供を愛する事は、其の子が成長したらば之を使役して自分には樂をしようと思つて居たものが、天理教を信じた以上は、我が身體でさへ神のもの陛下のものであるから、況してや我が子は神の子國家の子を預かつて居るのである故に一層大切に之を育て、倍々大きくなつたらば御國の御用に立てて貰ふのである。而して自分は

死に至るまで奮闘活動するのであると云ふ覺悟に爲つて、子供を愛し且つ自ら働くのである。是れが即ち慈悲の心使ひに本づく「ひのさしん」的行爲で、神の受け取るものは是れ以外に無い、所謂陰徳である。

普通の信者は、教祖や教會の役員等の如くに、一切の財産を擲つて人を恵み若しくは教會に入らずとも宜しいので、只だ心の執着を切れば助かるのである。此が大切な處である。其れから又た「ひのさしん」の精神から云ふと、人を助けるとか、人を恵むとか、人の世話をするとかして、假令ひ先方が禮を云はずとも、恩を返さずとも、素より此方は神に捧げたものとして出したのであるから、毫し

も之を怨み之を怒る事は無いのである。嘗に恩を知らぬ丈けでなく、
 縦しや恩を仇にして反對に此方を怨み罵つても、是れが却つて益々
 結構で、自分の悪因縁を切る手段と心得て、神に感謝して喜ぶので
 ある。今日世上の道徳では「言ふは易く行ふは難し」と爲つて居れ
 ど、天理教は心使ひが第一むづかしいので、其れが第一に大切と爲
 つて居る。神の受け取つて呉れるのは此の心使ひ即ち心術心事の如
 かに在るので、一萬圓の財産家が名譽の爲めか或は他の自己の目的
 の爲めに千圓の慈善金を出すのは易い事であらうが、然し低き優し
 き心を以て其の慈悲心から人が可愛いと思つて出す者は少い。さう
 云ふ純眞なる心使ひを以て出し、且つ自分の境遇に應ずる心一ぱい

の金ならば、縦令ひ一厘の金でも神様が受け取ると云ふ信仰である。
 第二に積極的方面の「ひのきしん」の事を述べると、其れは我が
 現在の境遇が特別の状態に在る場合の事である。一時的に小さい事
 もあれば永久に互つて大いなる事もあるが、兎に角、非常の場合に
 處する「ひのきしん」的の心事行爲の事で、斯かる場合に於いては、
 救済の意味を含むでやらねばならぬ。例へば嫁たる者が善くない舅
 姑に出會つた場合、下級の官吏が悪い上官に出會つた場合の如き
 は、一切を擧げて自分の過去の悪因縁と悟り、此の悪因縁を切るに
 は此の場合を去つても切れるものでない、何處に行つても此の悪因
 縁の種子を持つて居つては、何處の何人に出會つても虐待せられる

に相違ないと云ふ事を悟つて、己れを救済する爲めに先方に絶對の服従を爲し、先方に順應し同化して其の人の心の中に入り込むで先方と一心同體と爲り、先方の命に惟れ従ひ、誠の眞實、眞の心から先方に仕へて深切を盡し、周密懇到、己れの心身を捧げ、全努力を抛つて、己れは裸體と成り乞食と爲つても先方の爲めに一圖に働くのである。斯くの如くする事一年三年乃至は十年二十年でも、力のあらむ限り年月のあらむ限りを盡したならば必ず先方の心が和らぎ、先方も低き優しき心と爲り、自他共に助かるのである。若し先方が和らがない時は、己れの心を省みて益々身を慎み力を盡すのである。疾病の如きも斯かる優しき心に成つたら必ず助かると云ふので

ある。

天理教の信仰は斯様であるから、國家とか家門とか云ふやうな必要なる團體の關係が無い限りは、自己を没却して無我の働きをするのである。而して自分の國家が他の國家と戦ふやうな場合には、矢張り自分は自我を没却して己れの國家の爲めに働くのである。故に個人としては、天理教は他と争ふ事なく、随つて他の宗教と抗争するやうな事は決して無い。寧ろ旦那寺などへは能く付け届けをするやうに勧むる位である。

客秋九月七日、日比谷の國民大會で、天理教の婦人が演説したと新聞に在つたが、能く調べて見ると、極めて淺い信仰の者で、教理

にも通じてゐない者であつた。

天理教は上下各々自分の責任を重むじ、自分の身分學識徳望を考へ、因縁を顧みて其の言行を慎み、以て職分天分を完うする事を教ふる宗教で、民衆の騷擾などの如き不祥な事を人類社會から排除するのが其の目的の一つである。信仰の浅い者は詮方も無いことと嘆じて居る。

斯くの如き信仰であるに依つて、若し自ら朝に立てば死を以て職責を盡して、若し又た野に在れば出来るだけ當路者を援助して其の力を伸べさせ、反對黨をして天時地利人事の極を盡さすのである。其れでも事實天理に適はねば、因縁盡きて自ら殞るゝに至るのであ

る。故に決して私念私慾の爲め黨派などの爲めに、他を排擠する事は出来ない。尤も悪事や不正な事は切諫訓誡忠告論議色々な方法で矯正しなければならぬけれども、要するに、慈愛の基礎に立ち救済の精神を以て之を行はねばならないのである。

斯様な次第であるから、天理教の信者は實に優しいものである。例へば近き實例を挙げると、汽車電車に乗り降りを争ふ如きことは決してない。祭典の時などには數萬數十萬の信徒が參拜するけれども、丹波市驛に於ても曾て混雜したことが無い。其れから宿料でも書き出しを出す事がない。皆な一食十二錢或は十四錢と定まつたものを各自計算して事務所に置いて歸る、決して間違ひはない。而し

て謙遜、從順、寛容、靜肅、質素、儉約、歡喜、感謝、進取、努力の狀態は、上は管長より下は一信徒に至るまで、押しなべて所謂天理教主義の風俗をなして居る。其の他、各地の饑饉風旱水害等にも慈善をし、各地の道路橋梁の工事にも「ひのきしん」をし、納税兵役に何の不都合がなく、日清日露の大役にも其れぐの道を盡し、或は決死隊を組織して出願したやうな事も有る。凡べて是れまで天理教が國家社會に及ぼせる結果は小少ならぬ事實である。

十 天理教と將來の社會

德治的精神——堯舜——歐洲の思想、民衆の自覺——自己の幸福と其正の自我没却——救世軍——推讓、慈悲、犠牲の精神——救濟主義の教育

若し天理教が益々世に弘まつたならば、今日の有様が何う變化するであらうか。

先づ政治に就いて考へると、初めは専制政治で、次ぎに現今の立憲政治が起つたのである。君主國、共和國と區別はあつても、大體今日の文明國は立憲政體で無い所はない。然るに近頃往々立憲政治に弊害があるなどと唱へる者もあるが、此れは人類の歴史を無視する保守説で、素より取るに足らない保守説である。天理教の立ち場から見れば、今日の立憲政治は猶ほ不完全で、此れが終極の國家統治法では無からうかと考へる。然らば將來何に成るかと云へば、今一步人心の根柢から改造して、今日の法治的精神を德治的精神に

變へ、相互推讓して、國務大臣でも國會議員でも、平和の間に最も優秀なる人物を出すやうにするのである。但し斯くの如き理想は、古來東西の偉人にして夢想し計畫し實行しかけたことが無いではないけれども、天理教のやり方は、谷底から救ひ上げ、又た水を谷より山へ流さうと云ふ教理である。社會の根柢から段々と人心を改造して、民衆的に慈悲寛大、從順謙遜、勞働寡慾の美風を造り出すと云ふ主義である。故に古代の例へば支那の堯舜の理想などは雲泥の差がある。即ち民衆の自覺の上からやると云ふ根柢的方法であるから、實に偉大な深遠なものである。

現代の歐洲思想家の中には、民衆の自覺と云ふ事を叫むで居る者

もあるけれども、此れは自我の表現、個性の發展、若しくは自由の權利を十分に伸べ度いと云ふので、現代の社會組織に反對して之を破壊して行くと云ふ思想で、甚だ危険である。然るに天理教の自覺は全く是れと反對で、宇宙及び人類社會組織上の原理から各自の因縁を覺らしめ、是れに由つて自己の幸福發展は却つて眞正なる自我の没却に在つて、自ら他の犠牲と爲り、他を救濟する誠の心で他に順應し同化しつゝ、深切を盡し努力をするのが、生存競争の優者たり得る所以の理を自覺するのである。現代社會の有りの儘から建設的秩序的に一步步々々、時節を逐うて黄金世界に到達することが出来るのである。

一例を擧ぐると、近來救世軍が娼妓の自由廢業を勧めるのは人道の上より賛成である。然し天理教の方法は是れと違つて、樓主と娼妓とに對して諄々と教理を説いて、其の上から各自の覺醒を促がすのである。少々迂遠なやうであるが、此の方が一層根本的で且つ確實で而して國家社會の治安秩序と衝突しない最も自然的な救濟法である。其の効果は頗る多大である。去る明治四十四年四月の吉原大火の後に、中米樓主赤倉氏夫妻が豫ねて天理教の信者で、醜業廢止の志を懷いて居つたので、此の機會に百二十餘人の娼妓雇人一同を無償で解放し、且つ旅費まで支給して其の親許に返し、自分等は今現に下谷の東大教會並びに淺草分教會の役員として斯の教の爲めに努力して居る。

に努力して居る。

此の他、斯かる方面だけでも内地滿洲皆な好成绩を擧げて居る。此れ等は皆な政治問題、社會問題の參考として、學者爲政者の研究に値ひする事と信ずる。要するに、政治でも法律でも經濟でも又た教育でも、將來天理教の教理が今一層弘く普及する曉には、權利の主張、自由の叫聲、自己の威嚴保障等の思想は皆な一歩進むで、各人の自覺の上に築かれたる推讓的主義、慈愛的主義、犠牲的主義の精神が盛むに爲ると思ふ。眞正の權利とか自由とか。又た眞正の威嚴とか云ふものは、自ら主張して得らるゝものではなく、他より與へられて始めて完全に成り立つものであらうと思ふ。故に今日の

思想状態はまだ不完全で、目下進歩の途中に在るものと云ふ信仰を以て、此の信仰に基づいて教育事業も行つて往かうと思ふ。之を私しは救済主義の教育と名づけて居る。

十一餘言

天理教が開けてから今年で七十七年目である。教祖は七十五年にて「道あらくつく」と申されたが、只今教會の数が約三千、教師が二萬、信徒は三百萬、内地臺灣は勿論のこと、外は朝鮮滿洲より遠く英國ロンドン地方を始め歐洲文明の中心地にも布教し、既に外國人で本部に來て教師の檢定試験を受け、本國に還つて布教に従

事して居る者も少くない。

以上は天理教の教理並びに實際の大略である。今日は未だ天啓に本づいた天理教の眞の教理を書いた物が無い。何れも外面的のものか又は未信者の營利的作物である。其れ等に據つて眞正の天理教を誤解せられないやうに希望する。

終りに教祖の御詠一首を録する。

口さきのつるしよばかりはいらんもの、

しんの心にまことあるなら。

其の形を見ずして其の精神を觀られ度い。

て教
観徒とし
る天
理教
終

余の天理教
教育部に
入りし理由
法學博士 廣池千九郎述

余の天理教教育部に入りし理由

一

辱交各位

余は、前に病を以て官職を辭し、今回、自ら進んで天理教に入り、當該教廳の囑によりて天理教教育顧問及び天理中學名譽校長の職に就けり、之に關しては、家族を始め、親族故舊、皆、之を怪み且之を惜まれ、速に、東京に還られむ事を望み、種々の親切なる注意を試みられ、愚妻は、其情報を齎らして、去る一月三日態々舊任地伊勢山田に、余を訪問して、親戚友人の好意を傳へたり。されど、

余は、聊か覺悟する所あり、當時涙を揮つて、其好意を謝絶し、今日遂に茲に及べり。因て左に一言を述べて、以て其理由を辯ずる所あらむとす。

抑々、余は、余の親戚故舊等の知るが如く、敢て正式に高等教育を受けしに非ず、眞に微々たる漢學の素養を基礎として、二十餘年間奮闘努力の結果によりて僅に新學樹立の端緒を啓く事を得、茲に幸にして遂に昨年十二月十日を以て、我帝國規定の學位を得るに至れり。是を以て、余は、今や、我國家に對し、將又學問界に對して、更に具體的に一種の義務を生せし事は、余不敏と雖も能く之を知れり、即ち余の專攻學科は、余の始めて開拓に従ひし所なれば、

余は、其新學の運命に對しては、余の努力の及ぶ限りを盡して、其完成を期し、且一方には、其研究の方法を、後昆に示して、後繼者を造り以て斯學の大成を期せざるべからざるなり。

然しながら、予の専門學は、其範圍の廣漠なる、其資料採集の困難なる、其總合分解比較及び組織の上に巨大の頭腦手腕を要するほどの如きは、姑く措きて、其勞力と、費用とを要するの多大なること、到底、尋常人の想像し能はざる所にして、眞に一家の幸福を抛ち、心血を濺いで努力歳を累ぬと雖も、微力の致す所、其研究の前途尙遼遠なり。且之に加ふるに、現時、我國に於ては、學界の状態未だ此くの如き新學を要求すること、甚だ切なるの時運に進まず、

是を以て、余は今後猶ほ依然として、僻遠閑散の地に屏居し、持久
 寧靜、以て徐ろに其研究に従事せむと欲す。

幸にして天理教は、余が年來信仰する所の、我日本に發生せる大
 和魂武士道と一致せる、しかも兼ねて慈悲博愛の實質を有する、人
 類的世界的なる新宗教にして、而して今や、偶々當該天理教廳に於
 ては、其教育部に於ける進善發達に就きて、大に經營せらるゝに際
 會したれば、余の決心は、殆ど神の心に誘はれて、茲に至りしもの
 の如くに見えたり、抑も、天理教廳に於ては、目下天理教校別科及
 び天理中學の二校を有し、銳意宗勢の充實發展を期すと雖も、更に
 將來に於ける教育事業は、内外の學者を糾合して、最も趣味ある學

問上、教育上の新運動を起すべき豫想あり、されば余は、今回其天
 理教の教育部内に隠れ、丹波市東京の間に住し、法理研究會其他の
 學會にも出席し、聽講辯論研究に従ひ、以て一面學界に向つて、新
 學の樹立に努力し、又一方には天理教々育の爲めに、奮つて微力を
 致さむ事を期す。是れ余が、天理教々育部に入りし理由の一なり。

二

然り而して、余は、更に、此他に一の理由を有す。即ち余は前記
 の如く、獨立獨行を以て、奮闘せるが故に、終始自己の生命財産自
 由の全部を捧げて、學問の犠牲となれり。而して嘗に一身を犠牲に
 供せしのみならず、更に間接には、自己の父母妻子の幸福をも犠牲

とせり、凡そ君國の爲に犠牲となるは、大和魂及び武士道の本義にして、學問の爲めに犠牲となるは、人類的世界的なる人類の道德に非ずや、是の故に、世人は、不肖の我輩に對しても、嚮に學位を得るに及びては、尠からざる同情を寄せられたり、故に、此の犠牲的觀念に對しては、世人は勿論異議なかるべし、而かも此犠牲的觀念こそ、正しく宇宙自然の天理にあるなれ。然るに、余は、此の研究期間に於て其心事心術の上に多くの缺點を有したり。即ち余は、形の上は、正しく少くとも天理を行ひし考へなれども、心の内に、眞正なる天理を守る事を知らざりき。實に、余は、積年不知不識の間、生存競争の渦中に捲き込まれ居りて、自己の出世、名譽、利

益を重んじ、之が爲めに、競争、躁進、偏執、妄念に驅られ、爲めに身體を害する事尠からず、明治四十二年研究の歩大に進むと同時に、疾病身を襲ひ、昏々として學界に對する前途の光明を没したり、醫藥、鍼灸其術を盡すも、精神の修養に一大變化を加へずんば遂に、半途挫折の否運を免かれざるを悟り、始めて心を宗教に傾けたり。元來、余は、一の娛樂なく、學問の研究は、三度の食物を好むより以上にして、多情多恨、如何なる學科も略ぼ其堂を窺はざれば止まざるの概あり、殊に歴史は、始めより最も好む所にして、語學之に次ぎ、遂に此二科は、専門學者を以て目せらるゝに至りしも余の志は支那法制の上に在るが故に、固く文學的事業を以て、世に

出づるを辭し、回避隱忍、持重して苦節二十年、以て今日に及べる次第なるが、此理由よりして、又、余は、法制研究の必要上より、法律の前身たる世界各國に於ける原始的宗教より、降つて現代宗教にまで及ぼして、其研究を始め、遂に、之に向つて、亦、大なる興味を持ち、宗教に就ては、聊か知る所ありしが故に、茲に至つて一信仰を求むるに當りては、直ちに天理教の教理の優秀なる事に思ひ及ぼさずんばならず。因て、更に、間暇を以て、時の任地なる伊勢山田の天理教甲賀大教會の部下なる蒲生分教會の所屬勢山支教會に通ひ、且つ親しく其信徒の家に寄宿し、遂に爲めに、該教信徒の篤實敬虔なる態度に心服し、同四十三年一月、始めて該教に於ける

最下級信徒の一員に列し、鞠躬如として、該教信徒たるの義務を盡し、該教の教理によりて精神を一變せり、即ち深く該教の教理に於ける因縁の理に感悟する所あり、從來の功利主義を變じて、愛他主義となり、前に學問研究の爲めにせし生命財産自由の形の上の犠牲的行爲を、今や心の内にまで及ぼし、純然たる犠牲的觀念によりて一切の學問交際生活上に行動する方針を執るに至れり、只素より、我慾我慢に充滿せる余は、今に至つて、其決心の全部は、勿論十の一をも實現する事能はず、慚愧に堪へざる次第なれども、只其決心はかくの如くにして親孝行、人様大事、君恩、國恩、先輩の恩の大きな事を思ひ、かくて今日の境遇を歡喜感謝して、之を以前に比す

れば低き、やさしき、寛き、裕けき心と爲り、種々無用の工夫考案を止めて、神にもたれつき、自己の事を後にして、出来得る丈、人の爲め、國の爲めに努力を致さむと欲するの心丈は、常に胸中に存し居たる次第なり。爾後、果して心身緩和暢潤して、再び健康状態と爲れり。而も昨年九月より、再び痼疾の腦病神經衰弱に罹り、爾來仰臥半歲、醫藥一時全く其効を奏せざりしも、信仰の力以て能く精神を修養し、一切の心埃を去り、無我の慈悲心没我の犠牲的觀念によりて、學問と人道との爲めに、身を捨つるの覺悟を定め是が爲め遂にさしもの大患も、藥力漸次に奏効して能く之を凌ぐ事を得、今や又復健康を回復せり。是れ余の自ら進んで、天理教を育

部に入りし他の一の理由なり。

三

抑も天理教は、今を距る事七十六年前、天保九年奈良の南方約三里に在る。大和丹波市三島庄屋敷の豪農中山善兵衛氏の夫人ミキ子天性慈悲寛大にして、其心事行爲の天地神明に感通せしより、天神茲にかゝり來り、ミキ子の口を藉りて、千古未發の一大教訓を人類に示せるに起れるものとして傳へられ、號して天啓の教と云ふ。宇宙根本實在の神を祭神とし、其名稱は、之を我國史上に顯はれたる最古の十柱の神名を取り、其神徳を抽象して「天理王の命」と稱す而して其所謂根本實在の神は、宇宙を以て肉體とし、天理を以て靈

魂と爲し、人類は宇宙に對して、之を小宇宙と爲し、其肉體は、神の一部分にして、自我其物を以て即ち人間なりとせり。かくて此根本の神は實在にして、其力は大小宇宙の間に充滿し、發しては自然の現象となり、自然の法則となり、有形の物質互に物理的化學的に因縁するが如く、無形の天理亦因果照應して遺す所なく、かくて其所謂神の性質は無我普遍の慈愛心により、自疆不息にして間斷なき活動を爲し、無限無窮の進歩發展を以て其目的と爲し、而して人類の性質は之に合致して其天功を助くるに在りて、天理教の信仰は、即ち吾人々類の此神の性質に一致せむとして努力する、無我普遍の慈愛心に本づける行爲の謂なりと云ふに在り。

此故に、天理教の信仰にありては、從來の古き倫理説及び古來外國に發生せる舊宗教の所説と全く、其趣を異にして、宇宙及び人類は、漸次に進歩する性質を有し、學問技藝は勿論、道德の如き、幸福の如き、皆大古より次第に進歩し來り、今後も、亦、日に、月に、益々新にして、遂に、所謂黃金世界に到達する事を以て、其理想とし、現世を重んじ、進取努力の間に悠々不迫の趣を有し、眞に人類最後の救濟教たる實質を有す。されば、此信仰は、(1)、全然進化の理法に一致し、(2)、人類發展の歴史に一致し、(3)、又能く近世の科學哲學の主義に一致し、(4)、又今日の國家教育主義にも一致するものにして、(5)、しかも我日本固有の神道とは、正に符節を合はすが如くに

一致するを見る、夫れ宗教は、教育あり、學識あり、常識に富むものは、信するを得ずと云ふものあれど、今、天理教の如き宗教に至つては、何人と雖も人を信じ得られざる理由なく、随つて文明社會の宗教にして、教育あり、識見あるもの、信仰すべき理想的宗教と謂ふべきなり。

四

然り而して、天理教は、雷に、其教理のかくの如く合理的なるのみならず、其教理の貫徹力強烈にして、信者の道德實行の確實なるは、世界諸宗教の及ぶ所にあらず。即ち無我の慈愛を實現し、己を棄て、人の爲め、世の爲に盡すと云ふ、所謂人類の理想を現前に

實行する點に於て、余は始め之を見て驚き、且つ怪しみし位なりきしかもこれ少しの僞善にもあらず。眞實眞の赤心より競うて篤實なる行爲を爲し、且つ無智無教育の末派の信徒にありても、其心事術の美麗にして、殊勝なる到底筆紙の能く盡す所にあらず。教育あり、地位名望ある堂々たる紳士貴婦人も、一たび眞正なる天理教信者の精神に向つて、公平なる判断を加ふる時は、其良心には、必ず忸泥、慚愧の念を催す事あるべし。其至誠事に當り、從順謙遜人になり、強働寡慾の主義を奉じ、名利は之を推して人に譲り、慈善の事とし云へば己を損して之に趣くの状態、地方下級の信徒の状態悉く之を諸君の前に展開して見せまほしきものなり。仍て今予の親しく

最近に見聞せる一例を擧ぐれば、本年一月山中ひで子と云ふ一少女
 (十五)あり。勢山支教會役員山中氏の子なり、叔母の家に小間使を爲
 す時に、昨年末年玉として壹圓の金を貰ふ。乃ち之を出して本部婦
 人會の會員に列し、養徳院の義務を盡さむことを乞ふ。養徳院は、
 大和丹波市にある天理教婦人會の一事業たる孤兒院なり。此子豊頼
 柳眉、容姿花の蕾の如し。而して其心の美亦斯の如し。これ家庭の
 信仰、遂に、茲に至らしむるものなり。又數年前、伊勢の國志摩郡
 田曾小學校にて、教師、問を或る學級に發して曰く「富者の家俄に
 零落せし時、諸子若し不幸にして其家の養子、又は、嫁に行き居り
 しとすれば、如何にするか。」と、衆生答案區々皆取るに足らず。一

生答へて曰く「苦を以て念とすれば、榮枯心を滄ふる必要なし。」と
 其子は、天理教熱心の聞えある、同村山本某の子晋吉(時に十三才)
 なり、其答は、平素教理に本づける家庭の教訓に外ならず、此子昨
 年久居第五十一聯隊に入り、忽にして上等兵に擧げられ、今伍長の
 職を執り、模範兵たり、此等の子女たとひ假に十分なる教育なしと
 するも、其一代の幸運、今より推して知るべし。縁談及び人間一代
 の運命は、必ずしも人間の豫想計畫のみにて、十二分の好結果を得
 るものにあらず。理●智●の●教●育●何●ぞ●必●ず●し●も●、●其●程●度●の●高●き●の●み●を●誇●
 る●に●足●ら●む●や●。●品●性●人●格●の●高●尚●に●し●て●、●慈●悲●の●心●に●富●む●の●如●何●に●う●
 る●は●し●き●事●よ●、●嗚●呼●か●く●の●如●き●品●性●人●格●を●有●し●、●謙●遜●從●順●の●態●度●、

以て父母舅姑に事へ、又夫に事へなば、之を喜ばぬ親もなく、之を
 感心せぬ夫もなかるべし。又慈悲の心を以て、善く物を愛し、妻子
 を愛しみなば、之に懐かぬものはなかるべし。又充實せる犠牲の觀
 念を以て、我慢我慾を捨て、己の名利を第二に置きて長上に事へ、
 長官に事へ同僚に交り、社會に接し、職業を勵み、家業を勉めなば
 如何なる人、如何なる處にも、之を歓迎せられずと云ふ事あらむや
 彼の酒造家の如き隱匿脱税の策を廻すもの、頗る多しと雖も、天理
 教信者には、殆どかくの如きものなし、現に大和高市郡高市村の松
 村善兵衛氏の如き、全國酒造家の正直者の模範として、其筋の人に
 賞讃せられつゝあり。近時天理教信者の斯民會其他に表彰せらるゝ

111
 もの、頻々たるは、偶然にあらざるを知るべし。此故に天理教の信
 者は、汽車電車に乗降を争はず、即ちこは本部祭典の時に徴して、
 人の知る所なり、又、丹波市の信徒詰所にては、信徒の宿料記入の
 帳簿もなければ、一錢の宿費不納を爲すものなし。目に見えぬ神を
 目的として、心の誠を行ふものなれば、爲す所一として可ならざる
 なし。東海道小山の富士瓦斯紡績會社には、約一萬の職工あり、然
 るに數年前始めて、天理教信徒より成る、工女の一團を募集して、
 之を試みしに従順能く命を奉じ、勤勉能く努力し、會社の經濟を先
 にして、自己の我儘を犠牲となし、便所食堂の清潔、亦、全く他に
 異り、今現に一異彩を放ち居れり。此故に天理教の信仰世に普及す

其時は、軍隊の如き、工場の如き、大商店又は會社の如き、若くば又鐵道院郵便局の如き、多くの人を使用し、統御する處にありては其長上たる人々の利益幾何なりとも計られず。又、悪人の遷善悔過は特に著しく、其例枚擧に遑あらず。随つて囚人の感化免囚の保護には、尤も適切なり。されば一び天理の教の廣まりたる場合には、世に同盟罷業を始めとして、幾多の危険なる社會的反抗の騒動を絶ち又、箇人罪惡の迹を滅し、平和と光榮とを、此土に現はして、究竟人類の夢想せる黄金世界を實現すべき望あり、現に、筑後三潴郡大莞村の如き之に近く、余の實見せる伊勢度會郡濱郷村黒瀬七番組の如き、亦、然り。

五

然りと雖も、天理教は、去る明治二十年教祖没後より同四十一年一派獨立の前に至る迄は、其教會の事業未熟にして、事草創に出づるが爲め、各地多くの迷信者を出し、惡漢亦往々此間に混入して、種々なる不法を働き、且つ古來世界の歴史上にも遺れる、彼の宗教の意義を解せざる時俗の新宗教に對する迫害の響は、之と相和し、爲めに今に至つて猶ほ世人より淫祠邪教を以て目せらるゝは、甚だ遺憾なりと雖も、今、遽に、亦詮方もなし。而して今や、内部の充實は、教廳本部の全努力を以て當る所なれど、其信者の階級の今日にありて、猶草創の際、比較的下層のもの多きと、其信者の實行道

徳の、餘りに至精至純なるが爲めに、世上、又、或は故なく、之を毛嫌ひするものあり。(古來有力なる宗教ほど、最初は大なる嫌惡を買へり)されどかくの如き事は、これ世上人心の相異より來る杆格なれば、天理教の罪にあらず而して、亦、如何ともすべからざる所なり。只余は、教育の方面より銳意其進歩發達を圖らむと欲す。

六

余の、今回、天理教に入りし理由、大略前述の如し。されば、余は、今や天理教教育進成の任に當り、同教の爲め、將た又、人道發展の爲めに盡力すると同時に、學者としての本領は、之を學問の上、將た天理教々育の上に於て、決して失忘する事なし。而して予

は信仰と天職と、職業との三者は、斷じて之を混する事なし、即ち余は、其天職を遂行するが爲めに、其精神修養健康維持の必要上、深く天理教を信仰すれども、其天職は、新學の樹立と、人道の發達普及とに在りて、終始一貫して渝はる事なし。而して其職業に至りては、前には某専門學校の教授と爲り、今や天理教々育顧問たるが如くに、時宜に従つて、之を變更するも、敢て毫も不可なきを信ず只自己の絶對的信念を害せざるを以て要とするのみ。天理教の教理實に素より然るなり。

但し這回の天理教々育部の入部を以て、單に職業と見るは、聊か不當なり、即ち此職は、信仰の上より、其天職を行ふ爲めの方便

をも兼ねるものなれば、職業の一面、直ちに天職たり。世上に所謂職業は報酬契約の上に、或る権限を行ふ事なれども、子の天理教に於ける所謂職業は、日の寄進的にして、其の間何等の約束なく只赤心之を披きて自由に努力し、之れによりて、自然に與へたる報酬を、神の賜として拜戴するのみ、即ち日の寄進的行爲の結果に外ならざれば、聊か神聖の性質を帯び、世上の所謂職業とは同視すべからざるを信ず。

若し、職業と信仰とを混同して、無謀の擧を爲すものあらば、其人は、既に、狂人なり。而して、又、各人の信仰の如何を論じて、妄に人を褒貶し、其人の出處進退を妨害するものあらば、國家社會

は、遂に、共に、之より紊亂せむ。願くば諸君、年來余の苦節に處せし經歷に鑑みられ深く予の意を諒とせられむ事を。
右謹で一言を、辱交各位の机下に奉呈す。

大正二年三月十日

廣池千九郎

大正三年十一月九日印刷
大正三年十一月十二日發行

(天理教)

定價拾錢



著者

廣池千九郎

編者

神代種亮

發行者

植竹喜四郎

印刷者

東京市小石川區久堅町百〇八番地
高橋賢治

編輯所

東京市本郷區元町二丁目四十七番地

日月社編輯部

發行所

東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地
振替東京一二九五三 電話下谷三四一九

植竹內書院

日月社

日月社三大叢書

日月社は三大叢書の外逐次他の叢書を發行し
以て現代百科文庫の完成を期す。

編輯所 東京市本郷區元町二丁目四十七番地 日月社編輯所
發行所 東京市神田區佐久間町四丁目二十三番地 日月社
(振替東京二二九五三電話下谷三四一九)

顧問

生田長江氏
森田草平氏
伊藤證信氏
和田對白氏

編輯員

橋田丑吾
江部鴨村
青森微風

經營者

植竹喜四郎
安藤現慶

ポケット形美本
一部拾錢稅貳錢
毎月數冊宛發行

● 日月社は社會の各方面に亘りて、名高い書物や、面白い作品を、小冊子として廣く讀書界に提供する。

● 日月社はこの目的を貫徹せんがため、それらの専門大家に依頼して簡明平易に執筆を乞ひ、現代百科文庫を編纂して極めて廉價に世に頒つ。各科の要目左の如し。

- | | |
|----------|--------|
| ○ 文藝思想叢書 | ○ 宗教叢書 |
| ○ 政治經濟叢書 | ○ 哲學叢書 |
| ○ 教育叢書 | ○ 科學叢書 |
| ○ 梗概叢書 | ○ 驚異叢書 |
| ○ 問題叢書 | ○ 偉人叢書 |
| ○ 家庭叢書 | ○ 詩歌叢書 |

現代百科文庫 **宗教叢書**

全部五十冊
各冊十錢
郵税二錢

- | | |
|----------------|---------------------|
| 第一編 宗教入門 | 江部 鴨村著 |
| 第二編 日蓮上人 | 眞山 青果著 |
| 第三編 神道綱要 | 西川 光次郎著 |
| 第四編 法然上人 | 伊藤 澄信著 |
| 第五編 カラマゾフ兄弟(上) | ドストエフスキイ作
森田 草平譯 |
| 第六編 カラマゾフ兄弟(中) | 同 |
| 第七編 カラマゾフ兄弟(下) | 同 |

第八編	大聖釋尊	江部 鴨村著
第九編	しやくんたら姫	森田 <small>カリダ</small> 草 <small>サ</small> 平 <small>サ</small> 編 <small>作</small>
第十編	道元禪師	青森 徹風著
第十一編	エレン・ケイ	平塚 明子編
第十二編	クリスト傳	前島 潔著
第十三編	シヨウベンハウエル	岩野 清子著
第十四編	法華經物語	岡本 靈華著
第十五編	トルストイの宗教	橋田 東聲著
第十六編	ニーチエ	小宮 豊隆著
第十七編	高僧と母	江部 鴨村著

第十八編	親鸞上人	安藤 枯山著
第十九編	オーガスチン評傳	小宮 豊隆譯
第二十編	宗教新話	塚利 彦著
第二十一編	天理教評論	和田 對白著
第二十二編	聖徳太子	神代 種亮著
第二十三編	蓮如上人	安藤 枯山著
第二十四編	弘法大師	青森 徹風著
第二十五編	マホメツト	眞山 青果著
第二十六編	カーライルの宗教	淺見 琴一著
第二十七編	俳聖芭蕉	岡本 黙骨著

第二十八編

正岡子規

高濱虛子著

第二十九編

獄中記

オスカア・ワイルド作
生田長江譯

第三十編

王舎城の悲劇

梅原真隆著

第三十一編

心理的宗教觀

福來友吉著

第三十二編

ルーテル傳

栗原古城著

第三十三編

ブランドスとニイチエ

生田長江譯

第三十四編

續高僧と母

江部鴨村著

第三十五編

スピノザの宗教觀

安倍能成著

第三十六編

教徒として見たる天理教

廣池千九郎著

第三十七編

起信論綱要

寛潮著

第三十八編

バイブル物語

中村古峽著

第三十九編

孔子の宗教

宇野哲人著

第四十編

救世軍

西川光次郎著

第四十一編

金光教

和泉乙三著

第四十二編

自由基督教

内ヶ崎作三郎著

第四十三編

フランシス

東新著

第四十四編

眞言秘密

小林雨峯著

第四十五編

教界思潮評論

小笠原白洞著

第四十六編

王陽明

佐久節著

第四十七編

禪學入門

江部鴨村著

- 第四十八編 立正安國論略解 森田一能著
- 第四十九編 ルッソー評傳 橋田東聲著
- 第五十編 近代思想と宗教 中村古峽著

以上

現代百
科文庫

文藝思潮叢書

各冊十錢
郵稅二錢

- 第一編 父と母と娘 森田草平著
- 第二編 蠍(さそり) 真山青果著

- 第三編 無用語 安倍能成著
- 第四編 木の枯 小宮豐隆著
- 第五編 灰の音 與謝野寬著
- 第六・七編 半獸主義 岩野泡鳴著
- 第八編 藝人と藝術家 生田長江著
- 第九編 三十三の死 素木しづ著
- 第十編 杏の落ちる音 高濱虛子著
- 第十一編 人間的文學 森田草平著
- 第十二編 文藝評論 小宮豐隆著

現代百
科文庫
梗概叢書

第一編	神曲	森田草平	編作
第二編	ベル・アミ	モト田秋聲	編作
第三編	懺悔録	ル田長江	編作
第四編	マダム・ボブリー	フマロ御風	編作
第五編	死の勝利	ダナン上チ	編作
第六編	英雄崇拜論	カ村古イ	編作
第七編	ドリアン・グレ	マイ泰三	編作

第八編	女の一生	モガ津和郎	編作
第九編	春の目ざめ	ウエ田長江	編作
第十編	武器と人の職業	福永挽歌	編作
第十一編	森林生活	ト田長江	編作
第十二編	ポオラ (ヒネロ作)	加藤朝鳥	編作
第十三編	シヤントクレール (ロスメン作)	シエ代静雄	編作
第十四編	ウキルヘルム・テ	水の上	編作
第十五編	イリアツド及びオデツセ	ホ田錦策	編作
第十六編	若き葡萄の花咲く頃	中村古イ	編作
第十七編	フアウスト	森田草平	編作

小宮豊隆氏著 (既刊)

反響叢書 第一編 演劇評論

定價壹圓

郵稅八錢

新藝術界の革命威

新しい劇は輸入された。が、其の研究は俳優に於ても、舞臺監督に於ても、乃至批評家に於ても、極めて皮層的な外面的な部分に止まつて居る。これに對して眞に根本的な内面的な解釋を下して劇の核心から革命を齎した、若しくは齎さうとして居るものはわが小宮豊隆氏である。此の意味に於て、氏は實に新しい劇壇に於ける第一人者である。氏は又同じく根本的な觀方から歌舞伎劇の中にも新しい生命を見出さうとした。斯くの如くにして操人形から起つた歌舞伎劇は、面目を新にして現代に生れたのである。今此の時代を劃した批評家の、時代を劃した劇評を聚めて世に問ふも、強ち徒爾では有るまい。氏の劇評が如何に人生の大問題に觸れりと共に微妙な繊細な點をも逸さないかは直接本書について知られたい。

發行所 東京神田久間四丁目二十二番

演劇評論内容

第一 歌舞伎劇に於ける作と人と

- 中村吉右衛門論
- 米吉のおあさ
- 徳子の梅ヶ枝
- 野崎村
- 渡海屋
- 吃又
- 清玄
- 吉田屋
- 「勸進帳」の比較
- その他數編

第二 翻譯劇に於ける作と人と

- 「寂しき人々」 ハウプトマン
- 「ファウスト」 ゲーテ
- 「鴨」 イブセン
- 「モンナ・ヅンナ」 マーテルリンク
- 「エレクトラ」 ホーフマン・スタール
- 「夜の宿」 ゴーリキ
- 「サロメ」 ワイルド
- 「オセロ」 シェイクスピア
- 「武器と人と」 ショホ
- その他數編

第三 劇評斷片

- 女優について
- 舞臺美術について
- 坪内博士の「浦島」
- 坪内博士の「お夏狂らん」
- 斷片一
- 斷片二
- 斷片三
- 斷片四
- 斷片五

編輯所

東京市本郷區元町二丁目四十七番地

日月社編輯部

社 月 日 九一四三谷下話電三五九二一京東振替

平塚明子氏著

反響叢書 第二編 現代と婦人の生活

十月中發行
目下印刷中

生實在の活窮の一盡

あらゆる意味に於てわれらは平等でなければならぬ。わが平塚明子女史はその著「扇ある窓より」に於て「元始女性は太陽であつた。眞正の人であつた。今女性は月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く病人のやうな蒼白い顔の月である。」と叫んだ。平等の理想は血の力をかりて現實となり、痛烈なる生活欲求は最深奥の意志力を以てそこに精花を咲かす。女史はこれを自己の内部に求め、外部の社會に慮りて、常にたへざる苦闘を自らの生活の上に敢てせんとする最も赤裸々なる生活者である。女史が周到なる注意と、明敏なる頭腦とを以て各方面に放つた批判は、今雄渾なる筆致を以てこゝに、卷の書をなしたのである。圓窓以後、氏の展開を見んとするの士來りて本書につけ。

發行所

東京市神田區久間町四丁目二十二番地

現代と婦人の生活の内容

- 井井イとその母の生活
- 職業的婦人
- 日本に於ける婦人問題の世界的地位
- エレン・ケイ女史
- 西川文子氏の「婦人解放論」を評す
- 諸名士の所謂婦人問題について
- 民衆と政府と新しきものと
- 「動搖」に現はれたる野枝さん
- 「火の」娘を讀んで
- 「炮烙の刑」の女主人公について
- 森田草平氏に
- 赤城よりN氏に
- 「生活」記者に答ふ
- 獨立するについて兩親に
- 婦人の生活を重んじない社會
- 旅の七日間
- 小感想二三
- 「光」を思ふ

編輯所

東京市本郷區元町二丁目四十七番地

日月社編輯部

振替東京一五九三三話電下三九四一一日月社

278
6

誌 雜 藝 文 治 政

郵 稅 一 錢
一 冊 廿 錢

響 反

每 月 一 回
一 日 發 行

江 長 田 生 主
平 草 田 森 幹

家 諸 筆 執

◎ 評 論 界 の 高 等 批 評
◎ 創 作 界 の 清 新 な る 傑 作

◎ 文 藝 思 想 界 の 最 高 權 威
◎ 政 治 宗 教 界 の 新 暗 示

生 江 阿 橋 安 江 後 岩 生 沼 與 伊 岩
田 部 部 田 成 口 藤 野 田 波 謝 藤 野
長 鴨 次 東 貞 末 清 春 瓊 野 證 泡
江 村 耶 聲 雄 渙 雄 子 月 音 寬 信 鳴

森 安 鈴 青 德 佐 伊 村 素 平 野 小 阿
田 藤 木 森 田 藤 藤 岡 木 塚 上 宮 倍
草 枯 三 微 秋 春 野 た し 明 白 豐 能
平 山 吉 風 江 夫 枝 ま づ 子 川 隆 成

二 町 賀 須 西 社 響 反 區 鄉 本 市 京 東

終

